

図画工作科における「造形遊び」の理解と指導法について ー 学生の実践的な学びと教える力 ー

早 矢 仕 晶 子
岐阜聖徳学園大学教育学部

A study about understanding and leading "Art Play"
in arts and crafts education:
Students' practical studies and educational skills

Akiko HAYASHI

キーワード：図画工作科 造形遊び 指導法 学生の学び

I. はじめに

本研究は、岐阜聖徳学園大学教育学部における図画工作科の指導法に関する授業実践についての報告である。この授業実践は、学生が「造形遊び」の演習を通して実践的・体験的に学ぶ過程においての理解の深まりについて、また、その学びを指導する側に立った時に生かせるための意識付けを目的としたもので、学生の活動の様子、活動の振り返りレポートをもとに報告、分析する。この実践報告により、学びの段階的な深まりとそこから指導する側の立場で考えることへの意識の変換の重要性について述べる。

対象となる学生は、教育学部で小学校教諭免許取得を目的に初等図画工作科の授業を必修科目として受講する2年生の学生35名である。彼らは、1年時で図画工作科の基礎的理解を目的とした授業を受講し、平面や立体、色や形に関すること、技法、道具の活用法について実践的に学んでいる。本研究で取り上げる2年時での授業は、図画工作科の指導法に関する授業で、図画工作科の指導要領の内容の理解と、それをもとに子どもの発達にあった図画工作科の授業計画を立案するために何が重要なのか、どのような授業準備が求められるか、子どもにどう働きかけ指導するのかについて教師の立場で考えるものである。

本学教育学部の学生の実態としては、美術に関する授業は中学校まで、高等学校では芸術科目の選択で美術を選んでいなかったという学生が85%以上というのがこの10年間の教育学部の傾向で、対象となる学生のクラスについても同様の実態である。さらに、図画工作に対する苦手意識を持った学生もいる。これについては、①制作経験が少ないことから自信が持てないことや、②造形表現の良さに対する理解が狭く自分の活動の良さが分からないことも原因する。①については、1年時で図画工作科の授業を受講し造形表現の面白さやその過程の重要性を理解することで、苦手意識を少しずつ減らすことができてはいるが、それでもまだ自身の造形表現のテーマが明確にできないことや表現技術の未熟さにより造形作品がイメージ通りにならないことなどから、「できないから苦手である」と思う学生もいる。また②の造形表現の良さに対する理解が狭いということについては、小学校高学年から中学校の時期に写実的な表現で描く題材が増え、「見たものをそっくりに描くことができていれば良い作品だ」という評価に縛られているため、多くの学生がこういった考えを持っている。また、完成した作品を他者の作品と比較し、それにより自己評価することからうまれる部分も大きい。子どものころからの関心が作品を完成させることや出来上がった作品つまりはその成果物に向かいがちで、制作の過程での工夫や、造ることや観ることに対する楽しさや喜びの価値を意識した経験が少ないことも原因すると考える。教師を目指す学生にとって、制作の過程にある学びの価値や、造ること観ることに対する楽しさや喜びを意識して、それこそが造形表現について深く感じて考えることであることを価値付けるとともに、他者との比較で価値を確認するのではなく、自分が感じ考えたことをもとに工夫して表現するという自分らしい表現こそが価値あるものであるということに気付ける経験を重ねることが重要なのである。しかし、このような経験による造形表現に対する価値観を身につけた学生は多くはない。

これは、彼らがこれまでにこの部分を意識化できていなかったと言い換えることができる。また、この部分について意識化できるほどの評価を得る経験をしてきていなかったともいえる。彼らの意識にある価値基準や認められるということが、活動の結果としての作品でしかないというような誤解を解くことは、学生の苦手意識の改善のみならず、彼らが教師として図画工作を指導する上で、最も重要なポイントである。

本研究で取り上げる図画工作科での「造形遊び」の内容は、活動の過程を教師がいかにとらえ評価できるかが問われるもので、完成作品にしか価値を見出せない者には活動の意味や意義を理解し子どもの活動に価値を見だし、評価することは難しい。「造形遊び」を理解しその活動の意義を学生自身が体験的に学ぶこと、さらにそこから造形活動の意味を考え、造ることを見ることを楽しむとはどういうことなのかについて考え、教える側に立って生かせる力を養成することを目的とする本実践は、「造形遊び」に限らず図画工作科の造ることや観ることの子どもの活動について、指導者として深く捉える力になると考える。

Ⅱ. 実践研究の方法

本研究では、小学校教諭免許に関わる図画工作科の指導法の必修科目の授業のうちの「造形遊び」に関する5回の授業から学生の学びの段階的な深まりについて、演習活動と活動の振り返りのレポートから報告する。

対象の学生は、教育学部2年生の35名である。

演習活動は、①材料の特徴を理解する活動（新聞紙） ②個人から複数人へと変化する活動（石と枝を材料として） ③材料と場所の特徴を生かした活動の3つである。

活動の振り返りのレポートでは、写真を使ってそれぞれの活動がどの様に変化したかについて、学年にあった造形遊びの活動の提案について、指導者の立場で考えたことなどについての記述を求めた。

Ⅲ. 実践内容

「造形遊び」について

現行の指導要領において内容をA表現とB鑑賞、共通事項として捉えている。さらに、A表現を（1）造形遊びの活動と（2）絵や立体、工作に表す活動としている¹⁾。

平成29年度3月の改定による30年度からの新指導要領においても表現についての分類は同様で、内容を（1）発想・構想（2）技能とし表現を「ア、造形遊びの活動」、「イ、絵や立体、工作に表す活動」としている²⁾。現行においても改定後も造形遊びの活動は、子どもの表現活動において重要な位置付けであり、指導する者にとってその活動の目的や価値を理解できることが授業を計画、実施する上で大切になる。

造形遊びの活動は、材料や場所から刺激され始まる表現活動で、個人や複数人で共同して展開するものである。その活動は、子どもの感じたことや考えたことにより変化していく。変化し展開していく活動の過程にこそ価値があり、完成した作品についての評価だけでは十分ではないのである。また指導者は、造形遊びの活動を計画するにあたって、子どもがどのように材料や場所に出会い、それを理解するかについて検討することが重要である。理解の深さの違いで、活動の内容は変わってしまう。特に、材料の特徴や質感、素材感を実際に触れたり音を聞いたり匂いを嗅いだりするなど五感を働かせて体全体で感じ取ること、理解することが大切である。低学年での活動が、中学年、高学年へと発展する指導要領の構成を考えると³⁾、材料を知ることについても学年が上がるにつれ理解が深まり材料の本質をつかむことが求められる。図画工作科の授業で子どもが会える材料は、身近なもので親しみのあるものが望ましい。その材料を造形遊びの活動を通して新たな視点で捉えることや新たな発見をすることが、造形活動を楽しむことにつながるのである。

本研究の対象となる学生には、現行の図画工作科の指導要領の内容について解説し、造形遊びの活動について演習を通して理解することを伝えている。

1. 材料の特徴を理解する活動（新聞紙）

（1）造形遊びと材料理解について

この活動は、身近な材料の特徴を理解するとは具体的にどういうことなのか、学生自身が材料と関わるなかで知ることを目的としたものである。材料として取り上げた新聞紙は、子どもにとっても学生にとっても身近なものであり、実際に授業を計画するときにも準備しやすい。学生全員で教師の指示に合わせて演習活動を行う。

① 演習内容

- i) 新聞紙を2つに割く。
- ii) さらに2等分する。
- iii) 振って音を聞く。引っ張っていろいろな音を出す。破って音を出す。
- iv) 匂いをかぐ。
- v) 細く長くちぎる。
- vi) 揉んで質感の変化を発見する。

（2）学生の材料の理解についての分析

i、ii、vの活動では、「新聞紙の目」について知ることを目的としている。一方向に入っている目によって破りやすさや裂け方が変わることを認識する。クラスの半数以上が「新聞紙の目」を知らなかった。vの活動で、新聞紙の目を活用することで細く長くちぎることが実践できた学生は半数を超えた。

iii、ivの活動は、学生自身が子どもの活動をイメージしながら行う姿があった。このことは、学生にとって新聞紙は身近な材料で、子どもが活動するには適当であると考えているからであろう。その後行ったviの活動は、新聞紙の繊維のしなやかさを利用して、全体を丁寧に何度も揉んで柔らかくし、布のような質感に変化させるものである。その過程でも新聞紙を振って音を聞いたり、匂いを嗅いだりすることを行いiii、vの活動の時とは、音も変化し、匂いも強くなったことを確認した。また、見本の揉んで柔らかくなった新聞紙を手にして質の変化が学生の想像を超えるものであることに気付いた時、新たな視点で材料を観ることを感じることができた。大変な驚きとともに、学生自身も同じようなものにしたいという意欲が現れた。この時点ではじめて新聞紙の特徴を捉えたといえる。材料を理解するには、様々な方向から経験を重ねることが有効であること、驚きや発見が、材料と関わる経験を楽しむことにつながることを学生自身が理解した。

2. 個人から複数人へと変化する活動（石と枝を材料として）

（1）活動内容と目的

材料を石と枝として低学年の造形遊びの活動をイメージして行うものである。この演習の目的は、材料の特徴を捉えて生かした活動が行えること、低学年の活動をより具体的に考えられること、子どもの活動が変化していくことを理解できることである。

① 個人の活動

はじめに石と枝を準備して、各自で活動を行う。「並べる」「積む」という全員に共通した活動と、「自分で考えた活動」を行う。

② 複数人での活動

次に複数人で協力して「並べる」「積む」「複数人で相談して考えた活動」を行う。

（2）振り返りレポートの内容と分析

学生は、活動中に写真を撮り、演習活動の振り返りに活用する。活動の内容が変化するたびに写真に納めることとして、振り返りレポートを作成する。これは、活動が変化することと、造形物の良さが理解できているかを確かめること、教える側に立ち指導者として造形遊びを理解できているかを確認することを目的としている。

レポートに記入する項目は以下のものである。

① 個人の活動

「並べる」「積む」「自分で考えた活動」それぞれについて写真を使って変化する活動の様子を表す。写真にある活動について説明文をつける。

② 複数人での活動

「並べる」「積む」「複数人で相談して考えた活動」それぞれについて個人の活動と同様に変化する活動の写真と説明文で表す。

③ 低学年の造形遊びの提案

低学年向きの材料やそれに基づく造形遊びの活動について考える。

上記の学生による振り返りレポートを検討すると、造形遊びの活動を学生自身ができていることと、指導者の立場で子どもの活動を考えることができることには、差が生じることが明らかになった。自分の活動を振り返る中で、造形遊びとはどんなもので、良さはどこにあるのかといったことに気づくことができた学生をAとし、やや気づけた学生をB、気づけていない学生をCとして人数を示すと、Aは19人、Bは11人、Cは3人であった。造形活動を体験することで9割の学生は、造形遊びを理解した。

次に、指導者の立場で造形遊びを提案できるかという点については、Aのグループに属する者の中で、十分理解できて提案ができた学生は16人、不十分であった学生は3人、Bのグループでは、十分理解できて提案ができた学生は3人、不十分であった学生は8人、Cグループでは、十分理解できて提案ができた学生は1人、不十分であった学生は2人となった。このことから指導者の立場で造形遊びを理解し提案できる学生の割合が多いのはAグループで、自分が体験的に理解を深めることができた学生ほど指導者の側に立って考える力が高いということが示された。

3. 材料と場所の特徴を生かした活動

高学年の活動をイメージし複数人で行なうもので、材料と場所を関係させその特徴を掴み良さを活かした活動が目標となる。4つのグループに分かれ材料と場所を選んで60分で行う。材料は、タフロープ、紙テープ、新聞紙とし、場所は、廊下、階段とした。

(1) 4つのグループでの活動の様子と分析

① A班 タフロープと廊下（窓際のカウンターと椅子）（図1～図3）

タフロープを材料としてカウンターにある椅子を使って廊下に並べ、それに巻いたり、縛ったりする。何重にも重なってタフロープの面ができた。

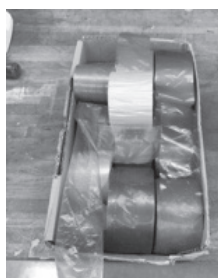


図1 タフロープ



図2 縛り付けるための場を作る



図3 何重にも重ねはじめる

② B班 紙テープと廊下（図4～図7）

紙テープを材料としマスキングテープを利用して廊下の奥行きを利用した活動。天井からまっすぐに下げたり廊下の壁を使って斜めにテープを渡したりと自分が中に入って制作し、自分たちの行為によって見え方が変化するのを楽しんでいた。



図4 紙テープ



図5 斜めに止める



図6 中に入って



図7 上から垂らす

③ C班 棒状の新聞紙と階段（壁面の照明器具）（図8～図10）

新聞紙を角から巻いて棒状にしたものを材料とし、それをつないで階段に構成する。はじめは、それぞれ個人で材料をマスキングテープで組み合わせ構成しようとしている。接合の方法や構成によって、強度がでて形が安定することに気づく。それによりさらに大きな構成物を作ることができるようになる。

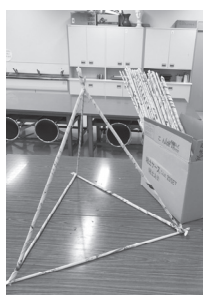


図8 棒状の新聞紙



図9 個人で



図10 複雑な構成へ

④ D班 新聞紙と階段（図11）

先の演習活動で新聞紙の特徴については、理解を深めているので、材料をどのように扱うか個人で試す活動からはじまる。階段の広い空間を、新聞紙を広げて覆うことで段を強調しようとしている。階段や新聞紙からイメージする事柄を個人で活動し、さらにグループのメンバーに提案するといった展開であった。しかし、グループの中でのコミュニケーションが上手くとれず、もともと個人の活動が仲間との相談や提案によって、複数人の活動の中で変化して発展するという様子は残念ながら見られなかった。



図11 階段を覆う

(2) 振り返りレポートの内容と分析

① レポートの内容

活動の振り返りとして以下の内容でレポートを作成する。

- i) 活動の様子について写真を使って説明する。
- ii) 材料の特徴について。
- iii) 場所の特徴について。
- iv) 材料や場所の特徴が活かした活動について具体的に記す。
- v) グループでの活動で気づいたこと。
 - ア. 参加者として
 - イ. 教師の立場で
- vi) 中学年や高学年の材料や場所と関わる造形遊びの提案。

レポートを項目別に分析すると、i、iiの項目で材料の特徴を造形遊びの活動の中から発見する姿が見られた。紙テープを天井から垂らしたり、壁を使って斜めに張ったりするB班の活動の中で紙テープを重いと感じている学生があった。紙テープは、何種類かの色があり、細く手でちぎることができる材料である。子どもにとっても扱いやすく、マスキングテープで簡単に止められるのだが、廊下のような広い空間で、長く伸ばした紙テープを何本も貼り付けるには、接着の方法を工夫することが必要となった。マスキングテープの使い方や紙テープの長さなどを考えないと、貼り付けられない場合も出てきた。紙テープの重みでマスキングテープがはずれてしまうのである。これは、活動の中での感覚的な発見である。他のグループは、紙テープを手にとった程度であるのでこのような感覚は理解できない。このように演習によって学生自身が発見しさらに活動を振り返ることで整理して考えられることは、主体的な学びの姿であるといえる。

また、新聞紙を巻いて棒状にしたものを材料としたC班の活動では、図12、13のように接合の工夫により強度のある構造体の形を発見している。図12のような接合では立方体のような形を保たせることはできない。形がひねってしまったり、ぐらついたりして安定しないが、図13のように三角形を一つのユニットとして構成させると、形が安定して図14のように照明の周りに取り付けることができた。光を作品に取り込んだダイナミックな活動となった。材料への理解の深まりが見られた。

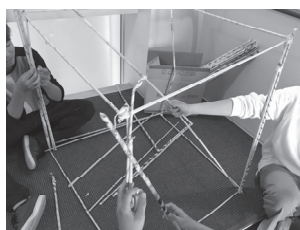


図 12

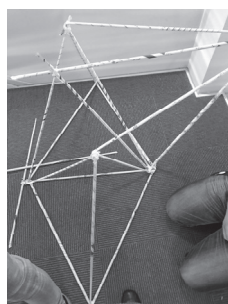


図 13

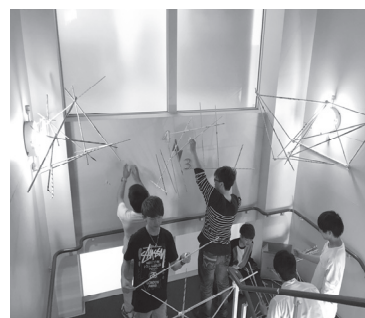


図 14

次に、vのグループでの活動の中で、参加者として教師の立場での気づきについて述べる。グループで活動するときに他者からの言葉でアイデアを見つけることができたという記述や、グループの活動は楽しい、人が工夫していることに気づいたといったものもあった。一人では発想しなかった思いがけないアイデアの発見が価値あるものであるということや、発見や変化があることが、グループでの造形遊びの楽しさにつながることを理解できた。また、教師の立場での気づきとしては、友だちのアドバイスなどが得られるグループの活動を授業で生かすことの大切さや、教師として全員の工夫や動きを見ることの難しさを上げたものもあった。実践内容2.個人から複数人へと変化する活動（石と枝を材料にして）の活動に比べ、教える側に立った発想が広がった。

Ⅲ. まとめ

—学生の学びの深まりについての考察と授業改善—

1. 学びの深まり

造形遊びを理解するために3つの演習と2回の振り返りレポート作成を行った。1、材料の特徴を理解する活動（新聞紙）では、材料を真に理解することを意識させた。2、個人から複数人へと変化する活動（石と枝を材料として）では、活動が変化していくことを意識させた。また、3、材料と場所の特徴を生かした活動では、グループでのダイナミックな活動と場所の特徴を掴み生かすことについて考えさせた。さらに、学年にあった造形遊びの活動を提案させ指導者の立場で考えることを意識付けた。このように、段階を踏んで演習を重ねることで理解の深まりははかれたといえる。段階を踏むことにより、学生が造形遊びを理解できる割合は高くなり、授業の目的は達成されたといえる。

造形遊びの活動の核心について蝦名氏は、「材料によって広がる造形遊びの展開」の中で子どもの行為の特性として述べている⁴⁾。「子どもは、自分の手から生み出された造形のひとつひとつを、体全体を使って感覚的に確かめながら、活動を繰り返しているということである。」指導者を目指す学生がこのことを理解するには、自分が体験的に理解していることが前提である。造形遊びは、評価が難しいことや全体の図画工作の時間数が少ないことから絵や立体、工作に表す活動の制作時間確保により授業で取り上げられることが少なくなってしまう現状がある。学生が小学生の時に経験した記憶もはっきりせず、経験自体が少ない。このクラスでは1割の学生しか造形遊びの経験について記憶していなかった。指導する側に立って考える前に、自らが体全体で感じて確かめること、楽しいと感じる経験は欠かせないものである。

2. 授業改善

ここまで述べたように、造形遊びは、学生にとって自身の小学生の時の経験として乏しく、イメージしにくいもので、活動の核心部分の何が大切で、どんな活動が充実した良いものなのかということについて授業で初めて考えるといった状況である。そのため、本報告のような授業実践を行うことは有効であるといえる。しかし、指導する立場に立って考える力、学生自身の実践力を考えると、授業での経験を生かし切れているとは言えない。図画工作科の他の授業においても、教師としての実践力につなげようという意識が弱い。学生としての受身の姿勢や甘さを感じる場面を目にすることがある。今後の課題として、学生自身の経験を生かす力の養成のため、指導者の立場をより意識付ける改善が必要であると考え。現在、演習活動中の記録を各自が写真に撮っているが、映像（動画）として記録し振り返ることも有効であると考え。他者の活動を知ることや客観的に活動を振り返ることから、教師の視点についても意識しやすくなると考えられる。また、活動する者と映像を撮る者に分かれて行うことも検討したい。映像や作成されたレポートをもとに意見交流を行うことなどから、学生の主体的な学びを期待する。

本実践から、造形遊びの理解のためには段階的な演習を行うことが有効であることと、演習での経験や気づきを指導者としての実践力に変換するには、さらに意識的に行う工夫が必要であることが明らかになった。また改めて、学生が造形表現活動の良さや価値について理解の幅を広げること、造形物の良さを観ることができることが、指導者となる彼らが自信をもって図画工作を指導するために重要であると再認識した。今後、有効性が認められた段階的な演習活動をより活用できるような改善を図る。

注・文献

- 1) 学習指導要領解説（図画工作編）（2010），10.
- 2) 改定学習指導要領 第7節 図画工作（2017）
- 3) 学習指導要領（2010）及び2017年3月改定の学習指導要領（2017）に共通する
- 4) 蝦名敦子（2017）：材料によって広がる造形遊びの展開 ―新たな教材化の視点を求めて― 大学美術教育学会「美術教育学研究」第49号，73-80.

